
見えない世界でみつけたもの

零・ZA・音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見えない世界でみつけたもの

【Nコード】

N4543A

【作者名】

零・ZA・音

【あらすじ】

見えない世界で見つけた大切なもの。事故で失明をした少年、雄太とその彼女、静。ずっとそばにいたい……いて欲しい。過去を乗り越え、本当の愛を手に入れた二人の物語。

見えるもの全てが世界だと思っていた頃。
俺は世界を全て見ていると思っていた。
でも、それは違った。俺はまだ見ていない世界があった。

「雄太、起きてる？」

「ああ……静か。起きてるぞ」

声が聞こえる。この声は静だな。

「雄太……髪ボサボサだよ」

「マジで？ あちゃー」

静の声が聞こえる。笑い声が上がって聞こえてくる。

頭に何かが触れた。優しく撫でるように俺の頭を触るこの感触は、
静の手だろう。

だが、俺にはそれが見えない。声の主が誰で、どんな顔かは知っ
ている。

俺の幼なじみで静。それでも俺には顔は見えない。

今の俺は視力を失っている。

「雄太……はい着替えだよ」

「……ありがとう」

俺の手に触れるこの感触は、いつも着ている制服だ。いつも、俺
の着替えを用意して手に載せてくれる静。

最初は服を着るのに苦労したが、今はやっと慣れきた。見えなく
ても出来る事は自分でしたい。

それが俺の考えだ。

どうしても出来ない事は最初は手伝ってもらう。そして、覚えて

からは自分の力でやってみる。

静には随分と世話になっている。俺が一年前、事故で視力を失ってから、ずっと俺の目の代わりをしてくれている。

本当は、今通っている高校も辞めるつもりだった。それを静が止めて、

「私が、雄太の目になる！　ずっと……これからずっと……」

そして俺と家族にこう言った。

俺には静の顔が見えない。でも声で分かった　泣いている静の顔が脳裏に浮かんた。

静は俺の手を取り、優しく握ってくれた。それだけなのに……たったそれだけなのに、俺は泣いていた。静の気持ちが、優しさが、俺の中で広がり、波を打つように響いていった。それから静はずっと俺のそばにいてくれる。

「雄太、ご飯食べる？」

「ああ……食べるよ」

俺には両親がいる。でも共働きで朝からバタバタして、もう出勤している。

「ご飯は用意してくれているので問題はないんだけど……」

「今日のは……多分まともだと思う」

「今えらく、間があつたな」

静から返答がない。多分、苦笑してるのだろう。

あの親共は、俺の目が見えない事をいい事に、無茶苦茶な料理を用意して行く癖がある。

見た目が普通だから、静でも見分けられない代物で、以前食べたときに悶絶していたのを覚えている。

見えなくても、声がそれを物語っていた。しかし……普通なら息子の心配をするだろうが、俺の両親はまったく昔と変わらず接してくる。それが俺には嬉しかった。特別扱いしない両親に、俺は感謝している。

「それじゃ、食べるか」
「そうね」

俺達は朝ご飯を食べ始めた。今日は取り合えず問題ないみたいだ。しかし、食べるのは大変だ。

静に食べさせてもらうのは恥ずかしいが、この際仕方ない。自分でも箸が使えるがいいが、実際は無理に近い。

箸は持てても、ご飯やおかずの場所が分からない。これでは、食べようがないってものだ。

その後、朝ご飯を食べ終わって俺達は、学校に行く事になった。

静と一緒に歩く。静は俺の横をしっかりと付いてきている。

学校までの道は、結構危ない所もあるので一人であるくのは危険だ。本当は、一人で行けるようにならないといけないのだが、まだ外を歩くのは正直怖い。杖を突きながら歩く俺の横を、静はしっかりとついて離れない。必ず俺の横で俺の様子を見ている。

見えないが、そこにいる気配は感じる。

静の息遣いも歩く靴音も、いつもの静がそこにいる。それだけで俺は幸せだった。静は時々、俺に話し掛ける。

『足元に段差があるよ』『曲がり角だから、気をつけて』……。

静は俺の目の代わりを本当に良くやってくれている。確かに嬉しいと思う。しかし、たまに静が無理をしているのが分かるので、それだけは辛い。見えない目が、あの日の光景を映し出す。もう過去の事だ……忘れようと思っても忘れられない。

静と一緒に学校までやってきた。

学校は前と変わらないのだろう。見えない目の奥に昔見ていた学校の光景を思い出す。

見えていたものが見えないと、こんなに苦勞するものとは思わなかった。だが、見えなくなったものは仕方ない。後ろ向きでは前

には進めない。精進あるのみだ。

「おはよう！ 雄太」

「あはよう。雄太君」

俺に気づいた友達が挨拶をしてくるので、俺も挨拶を返す。それは今までと変わらない朝の挨拶。

こんな俺を、いや、こんな俺だから特別扱いする奴もいる。

最初は特別扱いされるのが嫌で堪らなかった。誰も俺の気持ちなんか分かってくれる奴なんていない、と思っていた。

でも俺は考えた。それは仕方のない事。俺がもし立場が逆なら、そいつ等と同じ事をしているかも知れない。もしかしたら避けるかも知れない。そう考えると、これは受け入れるしかない現実だと思うようになった。

下駄箱で置き替えて教室を目指す。しかし、教室までの道程は普通の人間なら問題ないだろうが、俺にとっては大変難関だ。

まず、階段を上がって行くだけでも結構苦勞する。段差の間隔が掴めないと踏み外すので、最初は何度も躓つまずいては転んだものだよ。静も一緒にいるが、俺が出来るだけ手助けはしないでくれ、とお願ひしてるので隣で見ているだけ。

隣から聞こえる静の息遣いは、それはもう心配そうだからな。

一度だけ俺を助けようとして、一緒に階段から落ちた事もあるが、あの時は俺の方が驚いてしまった。やけに柔かい床だと思っていたら、静が俺の下にいたからだ。

俺を守る為なら、静は自分を兵器で犠牲にしようとする。

そのときは、かなり怒鳴りつけたが静の「雄太が無事なら」と言う一言で、怒気が失われてしまった。

俺は静に傷ついて欲しくない。これ以上、傷ついて欲しくないのに……。

学校の授業は特に問題なく続いている。

俺は黒板が見えないので、ノートは取れないので静があとで教えてくれる。

教科書は点字で書かれているので、目で見る必要はない。

これを読めるようになるまでは、並大抵の苦勞ではなかった。指で追っても意味不明な点の羅列に、頭が混乱して発狂しそうにもなった。それでも、理解して読めるようになったときは嬉しかった。

手が俺の目になった そんな感じだったから。

そしてもう一つの変化は、耳がよく聞こえるようになった事。人間の身体は不思議なもので、失ったものがあると他の器官がそれを補う。目が見えなくなつて、俺は音の判断力が少しだけ上がったようだ。だから感じる事が出来るものがある。

声は人の思いをのせて聞こえるもの。

それが少し理解出来るようになっていた……。

授業も終わり 放課後。

今日も一日、何事もなく終わった。静は俺と一緒に帰っている。

俺の隣を歩く静は、俺の手を握っている。帰りだけは必ず、俺の手を握る。

家に帰り着くまで……。

それは”あの”事故に関係あるのだろうか。あの事故は俺達が帰っている時に起きたのだから。

あの日、いつもの帰り道でそれは起きた。俺達に突っ込んでくる一台の車。その暴走する車のスピードは、歩いている人間では交わせないものだ。俺は咄嗟に静を庇って車と接触して、そのまま気を失った。

次に気付いた時、俺は病院のベッドで寝ていた。頭には包帯、そして目にも包帯があった。

そこで言われた一言 それで俺の人生は変わった。

光のない世界で生きる事。それは、その時の俺には想像が付かなかった。それよりも、俺の隣で泣いている声だけが聞こえる静が気掛かりだった。静はずっと「ごめんなさい」と俺に向かって繰り返し返していたからだ。

それは、自分を責めている言葉。自分のせいで俺の目が見えなくなった、と思っているのだろう。

俺は、静を助けたくて、助けたんだ。だから自分を責めないで欲しい。そう願っても静は一向に泣き止まなかった。

そして今でも、静は自分を責めているだろう。俺にはそう感じるあの日からずっと……。

それから数日が過ぎた。

あいかわらず静は毎日、俺の所に来て一緒に学校に行き、授業を受けて帰る　を繰り返していた。

そして今日も来ていた。俺に着替えを渡して、朝ご飯と一緒に食べる。だけど、今日は少し違う。

「静……調子悪いのか？」

「え？……そんな事ないよ」

そう答える静だが声に元気がなく、息遣いが少し荒い気がする。

明らかに様子のおかしい静　。

「少し変だぞ」

「大丈夫だよ……雄太」

やはり声に勢いが無い。いつもの感じとは違うのが分かるが、こんな時に目が見えないのは辛い。

見えれば、どんな顔をしているのか、どんな表情をしているのか、すぐに分かるのに。

静はそれ以上は喋らなくなってしまった。俺は一抹の不安を抱えながら、学校に行く事にした。

今日一日、静の様子はおかしかった。どこか変だ。声は段々と弱弱しくなっていく。

それでも静は「大丈夫」の一言で済ませてしまう。とても大丈夫そうには聞こえないのに。

今は学校帰りで、静と一緒にだ。今日も手は繋いでいるが、どうにも変だ……異様に手が熱い。

「静……お前、熱あるんじゃないか？」

「……ないよ。私は元気だよ」

確かに熱い。手から伝わってくる熱は、明らかにいつもと違う。

静は無理をしている。

直感でそう感じた。俺は手を離して静の額に手を当てようと伸ばすが、それは静の手に阻まれてしまう。

「大丈夫だから……雄太は心配しないで」

「……静」

俺の手を掴む静の手は熱かった。やっぱり静には熱がある。

なんで一言、言ってくれないんだ。

俺はどうしたらいい？ このまま静を先に帰すか？ いや、それは静が嫌がるだろう。

俺が思案していると、静は俺の手をしっかりと握り歩き出した。

「大丈夫 もう少しで家に着くよ」

ゆっくりと歩く静の息遣いが聞こえる。それはかなり熱っぽく、呼吸は速く荒い。

相当、無理をしているのは分かる。それでも俺のペースに合わせて歩く静。

俺はただ……早く家に着く事だけを祈っていた。

「着いたよ……雄太」

「ああ……」

ゆっくりと俺の手を離していく静。離された手に外気が触れるが、俺の手もかなり熱くなっているのか、冷たい空気が気持ちいい。

静の身体はもっと熱いはずだ。

「静……俺は大丈夫だから。もう帰っていいぞ」

「もう少し……もう、すこ」

そう言っつて静の声が消えた。次に俺の耳に、ドサツという何かが落ちる音が届いてくる。

まさか、そんな……。

「静……」

声は聞こえない。

代わりに、俺の足元 下の方から荒い息遣いが聞こえる。嘘だろ？ 静、返事をしてくれ。

「静！」

俺はしゃがみ込み、手探りで静を探す。手は無機質な玄関のタイルを触る。

冷たい感触が指を伝わってくるが、かまわず手を動かす。這わすように床を探ると、不意に触れる感触があつた。

これは静の身体 これは手、これは……これは。

肩から首、顎、頬、額。触れたそこは、異様なほどの熱を帯びていた。

「静！ しつかりしろ！」

見えない……静の顔が見えない。

こんな時、見えないのは辛い。どうすればいい？ 今はこの家には俺一人。静の看病なんて、俺一人では出来ない。

「そうだ 電話！」

救急車を呼べばいいんだ。

ここで時間を取っている訳にはいかない。苦しんでいる静を一刻でも早く、楽にしてあげたい。

「静、待つてろ。すぐ来るからっ」

「ゆっ、た……」

「待ってる、静」

俺は静をひとまず玄関に寝かせた。怪我をさせる恐れがあるから、俺には抱え上げる事は出来ない。

冷たいだろうけど、少しだけ我慢してくれ。

俺は玄関を上がろうとしたが、慌てていた俺は上がり損ねて転んでしまった。

「うぁ！」

受身なんて取れない。咄嗟に手を付いたが肩を強打し、何かが肩にあった。確か、玄関にはスリッパ置きがあったような気がするが、意外と痛いものだ。痛む肩を押さえて、壁を探して立ち上がった。

……暗くて何も見えない。

慣れたと思っていたのに、何故こんなに分からないんだよ。いつもはもっとそこにものがあるように分かるのに。

そこで俺は気付いた。

いつもは静がいる。俺の隣には、必ず静がいた。そうか……俺はいつも静の目を通して見ていたから、俺にも見えていたと錯覚をしたのか。

でも今はいない 闇の中にいるようで怖い……暗くて怖い。

「ゆ、うた……」

後ろから声がする。静が俺を呼んでいる。

「わた、し……だい、じょう……ぶ、だから」

俺を安心させようとする静の声が聞こえる。もう、話さなくていいから、少し黙っているよ。

「待ってる！ 静」

俺は静に叫ぶ。

壁に手を付きリビングを目指す。走りたい 昔ならこんな距離は、なんでもない距離だった。なのに今の俺は出来ない。

もどかしい。早く電話して救急車を呼ばないといけないのに。

「くそっ……急がないと静がつ」

足元に何もなければ確認しながら、一步、一步、歩いていく。
闇の中を歩く恐怖が俺を襲う。

急がないと　でも怖い。手探りで進む俺の手が何かに触れた。
玄関から一番近くにはあるのは、リビングのドアだ。

「ドアノブはどこだ……」

ドアに手を這わし、指を動かしながらノブを探すと、すぐに触れる感触があった。

ノブを掴んで廻すと、ドアの開く音が聞こえてきたので、ゆつくりと開けてリビングへと入っていく。

電話は確か、入ってすぐにあつたはず。手探りで電話を探すが、それらしきものに中々触れる事が出来ない。

そう思っていたら、何かが俺に手に触れた。電話？　思った瞬間、何かが割れる音が俺の鼓膜を震わしていった。

「な、なんだ……何が落ちた？」

足元に冷たい感触が触れる。靴下に染み込んでくるこれは……水？　どうやら花瓶を落としたみたいだ。電話の横に一輪挿しの花瓶があつたのを思い出した。でも今は、そんな事はどうでもいい。

電話はどこだ……俺は手探りで電話機を探す。

こんな事なら携帯を解約するんじゃないかった。俺にはもう必要ないと思つたが、まさか必要になるとは思いもよらなかった。

「確か……この辺だつたと思うが」

サイドボードに手を付きながら探していると、指が何かに触れていた。螺旋状に巻かれたコード　これは、電話のコードだ。

「あ、あつた！　痛っ！」

何かを踏んだ感触があつた。

そこから広がる痛みに、何かが俺の足の裏に刺さつたのだと理解したが、痛みが増していく一方。

多分、血が出ているのだろうな。痛みがあるのに、傷口さえ見る事が出来ない。

何が起こったんだ？ 俺は何を踏んだんだ？ 分からない……怖い。でも、俺の事はいいんだ！

「っ！……電話、を」

手はまだコードを掴んでいる。コードを辿り、受話器らしい硬いものが手に触れた。

俺は受話器を取り上げボタンを

「ボタンは……どれだ」

ボタンが見えないから押せない。今頃になって、こんな事に気付くなんて 畜生、どうする？ 適当に押してみるか？

「確か……」

ボタンを手探りで触れる。確か、電話は上の段が1から始まってそして、”5”のボタンには印が付いていたはず。

このボタンは……九つ並んでいる。

「あつた……これは5だ。じゃあ……このボタンが……」

俺はボタンを押した。間違っているかも知れない。それなら掛け直すまでだ。

数回のコールで電話口に相手が出た。

『はい。こちら救急センター』

「あつ！ すいません！」

電話は繋がった。

俺は事情を説明して急いで救急車を呼んだ。電話を切り、静の元へと戻る。

痛む足を引きずり、壁に手を突き歩いていく。リビング出た俺に聞こえる静の声は、掠れて俺に届く。

「ゆう……た。どうし……たの」

「なんでもないよ。今、救急車呼んだから」

「あし……血が、でてる」

「大丈夫だ……心配いらない」

静はこんな状況でも俺の事を心配してくれている。今は……今だけは自分の心配してくれよ。

お願いだから。

俺は床を這っていた。足が痛いせいもあったが、早く静の元に行きたかった。

冷たいタイルにいつまでも寝かしておくのは、俺としては嫌だった。指は慎重に床を確かめるように進む。

不意に、手が何かに触れた。柔らかく温かいもの。

「ゆう……た」

近くで静の声が聞こえる。とても近くで俺の耳に聞こえるこの声は、静なのか？ 今触れているのは、静なのか？

「静っ！ 動いてきたのか」

「だ……って、ゆうた……足から、血がで……てる」

「だからって……」

「わた……しは」

「もう喋らなくていいから！」

静は必死に喋ろうとする。聞いている俺の方が辛い。

お願いだから。もう……喋らないでいいから。俺は静の身体を抱き締めていた。俺は無力だ……何も出来ない。

静、お願いだ……俺を一人にしないで欲しい。

そのとき、俺の耳に届くサイレンの音。

段々と近づいて俺の家の前で止まる。それと同じくして数人の声が聞こえていた。

「早く！ お願いだ 静がつ、静が……」

俺は叫んでいた。有りつ丈の声を出して叫んでいた。

玄関を開ける音、数人の男の声。俺の腕から消える温もりと重み。軽くなった俺の身体を掴む腕が、俺を抱き起こしていく。

そして俺達は救急車に乗せられて病院まで運ばれた。

ここは病室らしい。

俺は看護師に連れられて来たのでよく分からないが、目の前のベ

ットには静が寝てると教えてもらった。

静かな寝息を立てている静は大丈夫そうだ。なんでも、かなり熱が高くて危なかったと聞いた。

それを聞いた俺は後悔した。

なんで朝止めなかったのだろう。こればかりがさつきから頭をグルグルと巡っている。静はやっぱ無理をしていた。多分、今までも随分と無理をしていたのだろう。俺が静に頼りつきりだったからだ。今日それを実感した。静がいないと、俺は何も出来ない事を……。

このままでは、静も俺も駄目になってしまう。それだけは駄目だ……絶対に駄目だ。

「……ん？　ここは」

声が聞こえる。この声は静だ。

「……雄太」

「静……目、覚めたか？」

俺は静を探した。静に触れたかったから。手が彷徨う……静を探して。

「雄太……」

「……静」

俺の手を何かが触れる。指に絡む感触は静の指。静の手が俺の

手を包む。

優しく温かい手が俺の手を包む。

「静　あの後、意識を失ったみたいなんだよ」

「……そうなんだ。迷惑かけて……ごめんなさい」

救急車の中で意識を失ったらしい静。俺には分からなかった。ただ、周りの声がそう言っていたのを聞いているだけだった。

……なんて不甲斐ないんだ。

俺は何も出来ない　静の手を握ってあげる事さえ出来なかった。

「迷惑だなんて思っなよ……。俺なんか毎日、静に迷惑かけている」
「そんな事ないよ。迷惑だなんて思ってないよ」

「それなら俺も迷惑だなんて思ってない」

「……雄太。ありがとう」

静は優しく俺に言ってくれた。その声は少し泣いてるように俺の耳に聞こえた。

「でも……静。俺はこれからは、一人で出来るようになりたい」

「雄太……？」

静の声は少し戸惑っているようだ。でも、俺は言わないといけない。

「伝えないといけない事がある。これ以上無理をして欲しくないから。」

「これからは、出来るだけ一人でやって見たい。俺は静に頼り過ぎていた事が、今日の出来事で実感が出来た」

「雄太……いいんだよ。気にしなくても……」

「駄目なんだ このままじゃ、俺も静も駄目になってしまうから……」

俺の声が響いている。

この部屋は静かだ。俺の呼吸と静の息遣いの二つが聞こえるだけだ。

「だから……静、今までありがとう。もう無理はしなくていいから」
「っ！……雄太！」

静の声が聞こえた。その声は悲痛な思いを持っていた。でもこれでいいんだ。

俺はこれ以上、静を。

そう考えていた俺の首に何かが触れた。首に触れたものは、しっかりと俺を包み込む。

そして俺の肩に感じる重み、耳のそばで聞こえる息遣い。これは静が、抱きついていていいのか？

「静……？」

「いや……」

声が聞こえる。

その声は泣き声に近い。静は泣いているのか？ 俺が泣かせたのか？

「……静」

「嫌！ ……嫌なのっ！ 私は雄太のそばにいたい。いつまでもいたい！」

静の声は響く。部屋の中に、俺の中に……。静に俺のそばにいて欲しい。それは俺の本心だ。それは否定しない。

でも今のままでは、いつか……俺達は駄目になる。

「静……俺は静が好きだ」

「雄太……」

俺の声に静は驚いているみたいだ。身体から離れる重み。首にはまだ静の温もりがある。

「だから……無理をして欲しくないんだ。俺のせいで静を苦しめたくないんだ」

「そんな事ないっ！ 私は雄太と一緒にいる事が好きなの……雄太が好きなの！」

静の声が聞こえる。

力強い、迷いの無い声が俺に聞こえる。その言葉は俺の心に響いた。

「静……ありがとう。でも俺はそれを受け入れたら駄目になる」

「雄太……」

「それじゃ、今までと変わらない。何も変わらない」

「それでいいんだよ……雄太」

「静……」

静の声は優しくかった。俺を包むように聞こえる声は、とても優しく聞こえる。

「いいんだよ……。今まで私は雄太と一緒にいれた事が嬉しかった。私、約束したよね？ 雄太の目になるって……」

「静……」

「最初は出来ないかもって思った事もあるんだよ。でも雄太は一生懸命頑張ってた。だから私も頑張れたんだよ」

静の声はゆっくりと思い出すように話している。俺は頑張ってたのだろうか……。

「私は雄太の隣を……っ……いつしよ、に……」

静の声は途切れて聞こえる。

嗚咽も混ざっている。堪えていたものが壊れたみたいだ。もう言葉になっていない。また身体に重みがかかる。

静が俺に抱き付いてきたみたいだ。

「一緒に、いれ……るだけ……で」

泣き続ける静を優しく抱き締める。俺はやっぱり静から離れられない。この一年……一緒にいて分かった事。

静がとても大切なかけがえの無い人だという事。だから俺は言う。

「俺といれば……苦労するぞ」

「それでも……構わない。私は……雄太と」

泣きながら答える静の声。俺はこんなに静に愛されているのか……。嬉しい、離したくない……静を。

「だったら……一つだけ約束してくれないか？」

「……雄太」

「一人で何もかも背負わないでくれ……もう何も」

これだけは伝えたかった。あの日から感じていた、静の俺に対しての負い目を、罪悪感を……。

そのすべてを取り除く事は出来ないだろう。俺と一緒にいれば、嫌でも思い出すだろうから。それでも伝えなければいけない。静を苦しめている鎖を断ち切るために……。

「だから苦しい時や辛い時は言っただけ欲しい。俺では力になれないかも知れないが……それでも俺は」

「雄太……」

俺の声は途切れた。

何かが俺の口を塞いでいる。温かく柔らかいものが俺の唇に触れている。

「うん……わかった。雄太……今までごめんね」

「……静」

もう一度、塞がれる唇。今度はさつきよりも長く優しく触れていく。しょっぱい味がするのは静の涙だろうか。

静の「ごめんね」の意味はどんな意味が込められているのか。

あの日の事故に対してだろうか、無理してきた事に対してだろうか、それとも今日の事だろうか。でも、そんな事はもうよかった。

静はやっと抜け出せたんだと思う。だから俺は、静の身体を抱き締める。優しく包むように抱き締める。

「静……大好きだよ」

「雄太……大好き、よ」

三度、塞がれる唇。

優しさとおしさが込められたものが、塞がれた唇から伝わってくる。

それは静の、俺の、二人の思い。

俺はこれから見つけるだろう。静と二人で……。

手に入れたこの気持ちを胸に、俺達是一緒に見つけていく。

俺達の進む未来を……。

愛しているよ……静。

見えない世界で見つけた。それはかけがえのないもの……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4543a/>

見えない世界でみつけたもの

2010年10月8日15時10分発行